窯ぐれ女

川口松太郎

窯ぐれ女

川口松太郎

窯ぐれ女

定価　三九〇円

昭和四十三年四月五日　印刷
昭和四十三年四月二十日　発行

著者　川口松太郎

発行者　星野慶栄

発行所　毎日新聞社
東京都千代田区竹平町一
大阪市北区堂島上二の三六
北九州市小倉区紺屋町七の二〇七
名古屋市中村区堀内町四の一

印刷・図書印刷　製本・大口製本

© 川口松太郎　一九六八

窯ぐれ女／目　次

序章　七
困った娘　一〇
名人陶工　三四
晩秋発色　六〇
祭り提灯　九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

炎の芸　一三五
炎の情　一六八
土は生きている　一九三
歳　月　二二八
野　火　二五二

装幀・さし絵

杉本健吉

窯ぐれ女

毎日新聞夕刊連載

一九六七・一一・二八～六八・四・一二

序　章

場所は名古屋の一流百貨店
時は昭和初年

「加藤慶助陶芸展」と書いた看板の陰にテーブルを控えて腰をおろしている美少女が、入場者の目を惹いていた。

浅黒い顔に化粧せず、紅もつけず、頭髪は無造作なひっつめで、ごく平凡な絣の着物を着ているだけなのに、人の目を惹きつける美しさを持っている。

慶助作品は、需要者の多い茶陶本位で、得意の茶碗が四十点も並び、入場者は中年の女性と茶器を好みそうな年配の鑑賞家ばかり、静かな人波が絶えず流れている。押すな押すなの大入りではないが、しっとりと人波の絶える時はない。

作品の値段は書いてないが、大半は赤紙が貼られ、売れていないのは大型の壺とか古瀬戸写しの印花壺とか、鑑賞陶器ばかりで、茶陶は殆んど売れている。

川越図書館蔵書

「茶碗を一つ買いたいが、高いだろうね」
よだれの垂れそうな顔が惚れ惚れと志野茶碗を見ている。単純な絵付けに、淡雪のような釉薬がほんのりとして、土味がこっくり出ている。
「やっぱり名人だ。気違い慶助といわれながらも、これだけ気品ある茶器の焼ける職人はないだろう」
そんなささやきが諸所に聞える。誰の声も同じような褒め言葉と溜息に似る嘆声だ。
「茶碗も茶碗だが、受付にいる娘も綺麗じゃないか」
と受付の娘をふり返る者もある。茶碗の次には受付の美少女が目にとまるのだ。
「あれが慶助のムロにいる女の窯ぐれだよ」
と知っている入場者もあった。
「噂のある女の窯ぐれはあれか。なかなかべっぴんじゃないか」
「そうなんですよ。綺麗ばかりでなく品がある。べたくさ白粉なぞつけず、さっぱりしているのがいい」
「顔立ちに気品があるし、あんな娘がどうして窯ぐれになったんだろう」
「何か曰くがあるね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

などと、どの入場者も噂をする。瀬戸の窯ぐれといえばやくざの渡り者と思われているのに、可愛いい娘だけに注意を惹く。

作者の慶助は会場へ姿を見せない。どんな場合にも陰にいて前へ出ようとはせず、会場のうしろから作品の批評を気にしている。

「受付にいる少女は君の何だ。まさか恋人じゃないだろう」

と慶助の肩を叩く知人もいた。

「とんでもありません。あれは東京から来た焼物研究家ですよ。真面目で誠実で熱心ないい娘なんです」

と慶助は弁解する。

二年に一度とか、三年に一度とか、彼の作品は展覧会以外、市場へは出さず、愛好者は個展を待ちかねて集まる。

受付の美少女は入場者の目をはねのけるように毅然として、一人一人に出品目録を手渡している。

困った娘

「みなさんが一日に三度ずつ手に持つ物は何でしょう。よく考えて答えなさい」

小学校二年生の学期初めに担任の教師がいった。

「それは箸と茶碗であります」

即座に答えたのは優等生の塚本栄子であった。

「その通り、日本人は毎日箸と茶碗の御厄介になっている。みなさんは箸と茶碗を自分で洗いますか」

それには答える者がなく、塚本優等生も自分では洗わない様子であった。

「毎日三度ずつお世話をかけ、それによって生命をつなぐ大切な箸と茶碗だから、今日からはめいめい自分で洗いなさい。茶碗を割ったり箸をなくしたり、そういう乱暴な事をしないように、

大切に扱わなければいけない」

学期初めだけに生徒たちは神妙に聞いた。

「諸君が成長して箸や茶碗を自分の力で買う事が出来るようになったら、好きな茶碗と好きな箸を買って、それを持つ事が楽しいと思うようになりなさい。一度買った箸と茶碗は一生涯一緒に暮らすのが理想です」

教師は繰り返していった。箸と茶碗の効用礼讃が精神修養の訓話につながって行く。この日から生徒たちは食事のあとの箸と茶碗を自分で洗うようになった。信乃もその一人で、狭い台所で茶碗と箸を洗い出した。箸はまがいの黒檀で、茶碗は粗末な雑陶にすぎず、子供ごころにも愛情の持てる品物ではなかった。それでも教師の言葉が心に残って

「独立出来るようになったら、いい箸といい茶碗を買って、自分で洗って大事にする」

と思い、独立の日を夢見るようになった。

女の独立は嫁に行く意味で、さもなければ箸や茶碗に贅を尽せる身分にはなれない。今はまだ駄目だが、箸と茶碗の知識だけは持つように心がけた。上等の品は買えないのでせめて歴史だけは知りたいと思って、箸と茶碗に関係のある本を見つけに図書館へ行った。茶碗を書いた書籍は相当あるが、箸の研究書は一冊もない。

太古の食事は手食だった。手でつかんで食べたのが、神話時代になってから箸を使うようになり、竹を割いて先を二股に分け、ピンセットのように作って、それではさんで食べ、それが発達して二本になり、材料も松柳檜等の良材を選ぶようになった。動物の骨や象牙で造ったのは中国の伝来で、中国人には箸に贅を尽す人が多い。

日本の箸は寸法も二十五センチ内外だが、中国は三十七センチ以上も長く、頭部に細工をしたり、陰刻絵に彩色をしたり、華麗なものが今でもある。日本の箸は先が細くとがっているが、中国の箸は棒状で、物をはさむ場所まで同じ太さに出来ている。

古語には「波志」と書かれ、その語源は鳥の觜から転訛したものとも、棒の端と端を合せて食べるからハシと呼ばれたともいい、竹製が多いので箸の文字を作ったともいわれる。

茶碗は茶を飲む為めの器で飯を盛って食べる器物ではなかった。茶は貴族の風習で庶民の生活には縁がなかった。茶碗に飯を盛って食べたのは江戸時代以後で、それまでは漆の塗り物であった。

信乃が茶碗や箸の知識を持つようになったのはずっとのちの事だが、小学校の担任教師に教えられた言葉が根になっているのは勿論で、瀬戸物屋の店先に立ち、飾り棚の中の茶碗を眺めて欲しそうな顔をしたのも、その影響だった。

「子供のくせに瀬戸物をのぞくなんて可笑しな子だよ」

と母は笑った。いくら笑われてもこの癖はやまなかった。お小遣いを貰うと新しい茶碗と箸を買って来て、机の上に並べて眺める風変りな少女になった。信乃の家は浅草今戸の瓦製造業者で、近くには素焼きの粗陶を売る店が沢山あったから自然とそんな風になったのかも知れない。

その上近くには浅草公園もあるし、仲見世まで行けば、上等陶器を売る店もあり、日曜日になるのを待って公園へ見に行った。

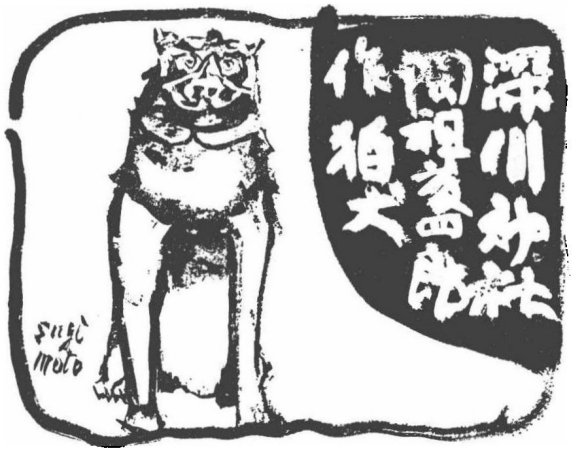
始めの内は怒っていた母も、だんだん諦めて、茶碗を買って帰っても叱らぬようになった。小遣いの貯まるたびに買って来るので、信乃の本箱の上にはいつも茶碗が並んでいる。

「そんなに茶碗ばかり買って来て瀬戸物屋でもするのか」

と父に冷やかされる事もあったが、誰に何をいわれても返事はしなかった。相手を判らせるためにはいろいろ話さねばならないし、話せば笑われそうな気がして、黙って茶碗を並べているだけだった。

「姉さんが又茶碗を買って来たよ」

新しいのを買って来ると弟は親たちに告げ口をしたが、両親も終いには何にもいわなくなり、やがて茶碗は二十数個になった。どの茶碗にも違った模様が描いてあって、鯉の跳ねている絵



もあれば、富士山の絵もあり、子供のおもちゃを模様にしたのもあれば、波型や網目模様や千鳥格子なぞ、絵は一つずつ違っていた。始めに買ったのは蓋のない裸茶碗だが、此の頃買うのは蓋のある上等品になっている。

誰かの粗相で父や母の茶碗を割る事があると

「お抱えの茶碗屋がいるから割っても心配ないだろう」

と父はいった。

そんな時の信乃は得意だった。父に向きそうな蓋付き茶碗を二つも三つも並べて父の選定を喜んだ。

「全くお前は変った娘だ。小遣いを貯めて飯茶碗を買って来る娘は日本中にお前一人だろう」

そういうだけで叱りはせず、叱るほど悪い遊びで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com